

## 歴史の底流に潜む生物学的なもの

香原志勢

歴史学者の林健太郎氏の御両親は私の生まれ育った家の近くに住んでおられた。今日そこは東京都新宿区高田馬場と呼ばれている。氏より十五歳も若い私は直接氏を存じ上げることにはなかったが、御母堂や御令妹は子供心にも品のよい方に見えた。少年時代、私が路上でお辞儀をすると、一個の成人に対するようにこやかに返礼された。当時、わが家周辺では林家は秀才揃いという評判が伝説化されていた。

さて、氏の「ワイマール共和国」(中公新書、一九六三年)の出版直後、私はこれを読み、門外漢ながらその美事な解釈と流暢な文章に大いに魅せられた。同時に歴史の流れは生物の動きに似ていると感じた。民主主義憲法の典型といわれるワイマール憲法の国家が、その庇護下の諸政党の抗争に揺れた末、皮肉にも反民主主義そのもののナチス政権の手に落ちていく過程は、お洒落なブードル犬が捨てられ、野犬化する経緯を思わせ、また肥沃な美田が誤った扱いの後、荒廃田に変貌していく成り行きを連想させた。いつの日か歴史を生物学の眼で見たならば、新しい解釈ができるかもしれないとひそかに思った。

しかし、この度同書を再読したところ、この不遜な考え方も崩れ去った。あえていうほど顕著

歴史の底流に潜む生物学的なもの（香原）

な生物学的な動きはそこには見受けられなかった。確かに政党間の抗争は争いの類であるが、たぶんイデオロギーが先行するため、動物一般の争いとの間には一線が画される。なぜ当時そのように考えたのであるうか。その頃の私は専攻する人類学をさらに豊かにしたいと考え、生態学や動物行動学に注目していたが、いささかその思いが強過ぎたのであろう。ともかくも若気の至りであった。

ところで、一国の宰相をキツネやオオカミになぞらえたり、強大な国をクマやライオンに擬したり、とかく歴史上の人物や国家を動物に譬えてわかりやすく説明する試みがある。だが、イソップ物語ならともかく、そのさい動物の本性についての誤解が多い。同種内でも、個体間の争いはあるが、猛獣は相手を死に到らしめることはあまりない。他方平和的とみられる草食獣は、逃げ場のない狭い面積内では相手を追いつめ、食い殺してしまうことがある。いずれにしても、動物たちの闘争は、様式は種々でも、すべて本能に導かれるが、人間の争いは恨みに端を発することが多く、その恨みは耐え忍ぶ間に記憶と憶測によって大幅に肥大していく。さらに武器の使用によって争いは残忍な結末へと加速される。人間の争いは動物のそれと格段に異なる。歴史の中にみられる抗争は、ほとんどの場合、集団の間の軋轢、葛藤であり、龍虎あい討つ式の一騎打ちではない。

その点、植物の群落や動物の個体群の間の攻めぎあいには国家や民族の間の緊張関係を連想させる。豊かに茂った松並木や杉林の偉容に私たちは感嘆し、永遠の命さえ感じる。確かに十分手入れされていけば、豊かに存続するが、ひとたび放置されると、たちまち荒れ果てる。今日、マツノマダラカミキリやスギカ

ミキリの大発生によって立ち枯れている松並木や杉林をしばしば見かける。じつは密集状態におかれた同種集団は生態学的に不安定であり、病虫害を受けやすい。そういう点で稲田や野菜畑は鳥獣や昆虫や菌類の格好の目標となる。保健医療体制不備の人口密集都市がコレラなど、疫病の脅威にたえずさらされているのは同じ原理による。反対に、各種樹木が混在する雑木林は丸坊主になりにくい。一本の樹木が食害を受けても、同種の樹木が近くになれば、食害は広がらない。そこは生態学的に安定している。視点は変わるが、単一産業都市は社会変動に弱く、多種産業都市はどうかこれを切り抜ける。

動植物における種間抗争を見事に説明したのが Charles S. Elton, *The ecology of invasion by animals and plants*. Methuen, 1958. (エルトン「侵略の生態学」思索社 一九七一年)である。それはさまざまな動植物の分布の変遷を述べるとともに、その多様性社会の安定を諷い、また人の手の介入のもたらす弊害や危険を説いている。そこに記載されているのは動植物の世界であるが、好奇心に富む歴史学の学徒には示唆的であろう。もちろん、そこには各種環境において多数の種が相互にどのように関係しあっているかが述べられているが、イデオロギーのような抽象的な主張は見られない。

通常、動物は強い方が生き残る。そこで鋭い牙、長い角、大きな体などをもって武装する動物が出現するが、かえって行動が制限され、日々食に窮し、衰退の道を歩むことがある。強大な国家もしばしば似た道を歩む。社会が巨大化すると、上意下達も下意上達も断絶し、死に体となる。これらはすべて適応性の問題であり、動物にも人間社会にも通用する。一藝に秀でたもの(特殊化)は集団内で好位置を保つが、

歴史の底流に潜む生物学的なもの（香原）

やがて情勢が変わると、その能力が仇となり、滅びの道を急ぐようになる。これに対して、平々凡々たるもの（一般化、すなわち非特殊化）は低水準に甘んじ、目立たないが、逆境に強く、生を貫き通す。これらの例は人間にも動物にも植物にもあてはまる。すべて適応の問題である。恐龍の絶滅もローマ帝国の滅亡も適応性の欠如で説明すれば、比較的納得されやすいであろう。

人体の体表の色が紫外線量と関連することは周知の話であるが、ここ千年の間でも、いわゆる白人・黄人・黒人の分布は大いに変動する。とくに政治的・文化的に優位な白人の拡大が目立つ。それは歴史書を紐解けばすぐ了解できる。白人は強い紫外線下では身体的に不利であり、かつてインドでは英国人は父子三代続かないといわれたが、現実には、サングラス、衣類、家屋、冷房装置、医療の完備により、低緯度地帯にほぼ完全に文化的適応を果たせた。ところで、歴史書のどこにも見当たらないが、ここ数十年間に日本在来種のヤマトゴキブリは外来種のクロゴキブリなどに駆逐されつつある。本来より暖地性の外来種ゴキブリは漸次寒冷環境へ適応しつつあるが、また日本の家屋内の暖房化が進んだため、いっそう生息地を広げている。人間の歴史をゴキブリのそれと比較することを好まぬ人もいるだろうが、適応と分布についてのこれら事実を直視すべきであろう。

それでは、適応こそ歴史を生物学的に解釈する鍵なのであるか。慎重な考察が必要である。例えば柔構造の高層建築物は横揺れ地震に強い。それは適応現象のようにみえるが建築物は生物ではない。つまり有機的なものばかりでなく、無機的なものにもまで適応現象らしいものが通用するということは、構造をも

つものの根源的特性なのだといえよう。適応の概については慎重に考察することにしよう。

とはいえ、生物とは次元を異にしても、歴史の底流には生物学的なものが潜むようにみえる。人類進化は動物進化を引き継いでいるが、その人類が創出した文化の発展は、次元を変えて人類進化を引き継いでいるといえよう。そこで、私案ながら、これらの関係の表を文末に掲示する。人間の手足は魚類の胸・腹ビレに起源をもつもので、陸上に出るや、前後肢となった。直立した人類では手は前進運動から解放され、道具を用いたり、指さしたり、周囲に働きかける器官となった。包丁が歯にかわるものであるように、道具の大方は人体の一部の延長線上にある。もちろん道具の多くは手が扱う。この立場に立つと、動物進化↓人類進化↓文化発展という系列が読みとれる。この進化⇨発展は物体系・作業系・情報系・環境系にわけると理解しやすい。つまりさまざまな面で文化の基底部は生物の適応の発展段階を構成するといえる。もちろん、文化の多くは生物学的に単純に解釋できるものではない。以上、御批判をお願いしたい。

この度、林氏の旧著を再読し、あらためて社会民主主義やソヴェト共産主義のあり方に対する氏の批判的姿勢を随所に読みとることができた。そしてマルクス主義的史学者から東京大学文学部長、同総長、自由民主党参議院議員、そして今日の自由な立場という道程を、私なりに理解できたように思える。「今日の進歩主義者は明日の保守主義者」は政治学の金言であるが、同様、生物の特性でもある。それは生命ある者には自然な流れである。大切なことは学者として批判的精神を維持することである。

(立教大学名誉教授)

各進化様式・段階における適応例  
 (香原：人類学講座「適応」一部改変)

進化段階 進化様式	動物の進化	人類の進化	文化の発展
物体系	ヒレ→四肢 摂食器 呼吸器 (鰓→肺) 心臓 (心房・心室) 中枢神経 外皮 (鱗・皮膚・毛)	直立姿勢 発達した手 大化する脳 咀嚼器退縮 体毛→少	各種道具 機械 衣服
作業系 (活動系・ エネルギー系)	前進運動 呼吸法 栄養摂取 変温・恒温性	直立二足歩行 手の働き 人体運搬 勤労と遊び 発汗	火・蒸気・電気 動力 (水・風・家畜・ 電力) 農作物・調理 乗物 (速度・距離・運搬)
情報系	尿によるマーキング 鳴声・囁り 身ぶり 神経作用 各種感覚	音声言語 身ぶり・表情 手話 知能 視覚・指頭触 覚	文字・絵画・印刷 電話・テレビ 舞踊・演技 コンピュータ 化粧・香水・装飾品
環境系	棲息域の拡大 (水・陸・空) 巣・穴	行動域の拡大 洞穴利用	汎地球の分布 家・建築 乗物 (居住性) 照明 生産域の拡大

歴史の底流に潜む生物学的なもの (香原)